

風のように

甘木教会

主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一



気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。

ルカ18：6

【説教要旨】

生物の授業で、「人間とは祈ることのできる動物である」ということを聞きました。人であるということは祈ることです。イエスさまは、人間の真実の姿を回復されるために私たちのところに来て下さいました。

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」とありますように祈ることを弟子たちに教えたのです。「**気を落とさずに**」という言葉があります。祈ってどうなるというわけではないという問い、疑問はいつも祈るたびにもたげてくるのも事実ではないでしょうか。「**気を落とす**」ということがあるということイエスさまはご存じなのです。ですが、「**気を落とさずに絶えず祈らなければならない**」と言われるのです。

祈りをこのように言うておられる人がいます。「祈りの本質は、神に対するわたしたちの願いがききいれられるかどうかということよりも、わたしたちに対する神の思いの実現を願い、それに信頼することにある」。私たちの祈りに力があるのでなく、神に力がある。この神への信頼が神への切実な願いとなり、祈りになるといわれるのです。

ここの譬の結びにある―「人の子がくるとき、果たして地上に信仰を見出すだろうか。」―「信仰」と言う言葉に注目しましょう。「信仰」という言葉は「信頼」とも言えます。

イエスさまが、絶えず祈るようにと教えました。絶えず祈ることは、神への信仰、つまり信頼にあるということなのです。

ですから私たちがまず求めることは「**まず神の国と神の義をもとめなさい**」とあるように、わたしたちが切に求めるのは、祈りもとめるに値するものは神の国とその義であるキリストであるとうこと、このイエス・キリストへの信仰、信頼こそ祈りの本質であるとうことです。

「祈ったってなんになる」という言葉には、イエスさまが結んだように「**人の子がくるとき、果たして地上に信仰を見出さ**だろうか。」ということが根底にある。私たちの祈りに力があるからではない、神に、キリストに力がある、そしてこのキリストが、神が私たちの中になにかを起こしてくれるということへの信仰、信頼です。

ここで、やもめがしきりに願うことに注目するが、これを聞き受け止めてくれた裁判官の心が動かないなら何も起こらないと同じように神の働きなくして祈りはなりたないのです。神が働かれるここに祈りがあるのです。「神は速やかに裁かれる」とあるように神が働いてくださる、ここに祈りの基本があるのです。そういう側面を私たちはこの譬話から聞き取ることが出来ます。

奥村神父が「真の祈りとは、神がかりでもなければ、ご利益信心でもない。・・・それは、全人的な神への信頼に生きる人間の赤貧の魂に流れる神の命の脈動なのである。」と言われることにほかならないと思います。

神への信頼にある祈りには、いつも一つの言葉がついてくる。

「**絶えず**」ということである。「**イエスは気を落とさずに絶えず祈らなければならない**」とあるように。奥村神父は、「祈りは、雑草のように何度踏みつけられても

頭をもたげる不死身の願いが神に向けられる、貧しい人間の嘆きであり、訴えである。どろに根をおろして花を咲かす蓮のように、キリストの祈りは、貧しいもの、小さなもの、しいたげられたものの苦しみのなかに、その根をおろしている」と言

われます。神への信頼、信仰に立って生きる私たちは、私たちの願うことが、たとえば病気で死にそうな子供をもった親がいる。誰もが癒されることを願う。しかし、現実には癒されるどころか死を与えられる。この深い絶望の中であって、祈りは、雑草のように何度踏みつけられても頭をもたげる不死身の願いが神に向けられる、貧しい人間の嘆きであり、訴えとなって出てくるように私たちは立てられていくのです。だから私たちの祈りには「絶えず」という言葉があります。「絶えず」ここには神への信仰、信頼なくしては起こらないのである。

癌で死ぬことが分かっている鈴木正久牧師が「主の祈り」という本の前書きに次のように記しています。

「今年 88 歳の母は、私を信仰に導き伝道者となることを励まし、主日礼拝や聖書研究会にいつも最前列にいて、私の話を聞き、筆記し、その写しを知人に送ったりしていました。わたしが健康で働いていること、そのために母は常に祈り、またそのことが母の喜びであり、生きるはげましであることを明らかにした。この年老いた母を残して、こう思うとき、わたしは涙がとどめることができません。

しかし、今こそわたしは、主とそのみ国の恵みが、教会の上にももちろん、母の上に、そして本当になつかしいすべての人々の上に、いっさいにまさって力強く君臨しておられることを信じます。」いっさいにまさって力強く君臨しておられることを信じる、この主への信仰こそ祈りの根源です。

森一弘司教は次のように結んでいます。

『神は人間の叫びを必ず聞いてくださる』という信仰。これが、祈りを支えていなければならないのです。祈りと信仰は結びついています。『人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。』と今日の福音書の最後に、『祈り』が『信仰』に置き換えられているのもそのためだと思います。神への信仰が揺らげば、祈りも揺らぎます。祈りを大切にする人はさらに信仰を深めますが、祈りを軽視する人は、神を失い、人生を失っていくことになります。

牧師室の小窓からのぞいてみると



宗教政党・公明党が、自公連立を解消した。特に「政治と金の課題」など自民が変わらないと片付かないことがあるが、平和主義、大衆主義、クリーンを党の理念、方針としている公明党としては我慢の限界だったのかしれない。

今の大変化していく世界にあって、宗教政党は時代に抗しても自分の理念を貫くことがその姿であると思っている。

創価学会初代会長、牧口常三郎は、戦時下、宗教・思想の統制を図る軍部権力の手で1943年（昭和18年）に治安維持法違反ならびに不敬罪の容疑で検挙・投獄され、1944年（昭和19年）11月18日、獄中で逝去した。

現代世界は、「時が迫っているからである。ヨハネ黙示録1：3」という終わりが待っている。こんな時だからこそ自分をはっきりとさせないと時代に呑み込まれていく。

園長・瞑想？迷走記



今、激変していく幼児教育・保育の現場にあって、ルーテル羽村幼稚園は、「2026年度教育・保育指針」を園長、副園長、園長補佐を中心として、作っている。生半可なものではあってはいけないほど壁際まで追い詰められているのが現実だろう。それは、同時にプラスの面でいえば、「自分らしい教育・保育」とはどういうことか保育の初めに戻り、展開するという希望の取り組みではないかと思う。すぐには、で出上がるものではないものではないと思う。だから楽しいと思う。

「それって、保育の常識ですか？ほんとうに大切なこと 柴田愛子 著 すずき出版」を読み直している。まさに教育・保育現場にあって、常識をひっくりかえすような刺激的な文が続く。「保育に行き詰ったとき」という中で、「ぼ～っと子どもを見る」、「徹底的に子ども遊ぶ」ここから、難しいことを越えて、私の教育・保育が生まれてくるかもしれないと思うようになっている。

日毎の糧

聖書：あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守って
くださるように。今も、そしてとこしえに。 詩編 121: 8



ルターの言葉から

信仰は大いなるものである。それは詩篇が完全にして
いる。

『卓上語録』M.ルター著、植田兼義訳、教文館

信頼

「やまべに向かいて 教団讃美歌 301」でよく知られた詩篇である。別所梅之助の詩は神への信頼を格調高く詠っているように、神への力強い全身的な信頼の詩篇である。

巡礼の旅の中で、人々は、自然の中で、天地を造られた神を感じたのではないだろうか。「草木が芽生え、動物たちが暮らすごく身近な自然のなかに、古代のイスラエルの信仰者たちは創造の神の配慮あるいははたらきを見て取っている。多くの巡礼者にとって、徒歩でエルサレムを往復する旅路は、雄大な自然に触れるとともに、神の配慮の中に生かされている身近な自然を感じる絶好の機会であったにちがいない。（詩編の思想と信仰Ⅴ 月本照男 新教出版）」と古代の人、これを詩にしたそして今、これを読む者は、「この作品は、さまざまな不安に脅かされながらも神の守りのうちに人生を歩む信仰者の歌として読むことが出来るのである。人の歩んでいかなければならない将来の暗がりや、以下のように語りかけることによってこの作品は照らし出されている。―――天地の造り主である神が、われわれを守られるのだということ、そしてこの神はいかなる時にも目覚めている〈生ける神〉なのであって、この御方に信頼する者、ひとりひとりの旅路を守り導かれるのだと。

（詩編 詩篇注解 勝村弘也 日本基督教団・宣教委員会）
と受けとめている。

祈り：神に信頼する者のひとりひとりの旅路を守り導かれる神に委ねていく私たち一人一人にしてください。

甘木通信

コヘレトから「死ぬ日は生まれる日にまさる。」

夜になると高熱が1ヶ月半ぐらい続き、検査、検査、抗生物質の内服薬による治療となった。体力も落ち、思うように体も心も動かない。幸い礼拝担当も休むことなく、幼稚園の仕事も通常通りしていた。



私の周りの親しい同期生、同僚は若くして亡くなっている。教会学校の生徒だった子どもらが、今年、立て続けに若くして亡くなっていった。彼らの牧師だったブラジル時代から尊敬し、親しくしたD牧師は、十数年前、定年間際の70歳に亡くなった。最後に会って、ご夫妻と食事をしたとき、先生がステーキを美味しそうに食べたことを今でも思い出す。高熱が続くとき、私は、72歳を迎えた5日後、先の教会学校の生徒だったK君が天に帰った。

自分も、もしかしたらと思うようになった。そんな思いの時、死とか云々よりも、よくもここまで生きて来られたということ、楽しい思い出で幸せになっている。確かに悲しいこと、苦しいことがいっぱいあったが、これを越える楽しいことばかり手の中にあった不思議な感覚に捉えられた。「死ぬ日は生まれる日にまさる。」とはそういうことかと感じさせられている。

それは、生まれてから、死ぬまで日々は、神さまによって素晴らしい日々とされていることだと思えてきた。

神のなされることは皆その時にかなって美しい。

口語訳聖書コヘレト3：11

これを越えたら、長生きしそうだと感じている。

(甘木日記)土)「キリスト教講座」で甘木教会に行き、やっと一泊するまでになった。日)礼拝、掃除、お茶の会、役員会。いつものことが嬉しい。月)九州教区・壮年会集いだが幼稚園の剪定で庭師が入って行けない。火)設置者の大和牧師が休みなので早朝から幼稚園に行く。最後まで見届けて帰宅。ここまで回復してきた。水)朝、大学病院で診察、午後、職員会議、帰宅しパソコン修理に。木)松崎保育園の聖書の学び、子ども礼拝。夜、東京に。金)羽村幼稚園の運営会議。夜、福岡に。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
ぐちらない聖人（牧師）もいます。

土）夜に高熱も出て来なくなったので、「キリスト教講座」に甘木に電車に出かける。暑さは残り、体力が落ちている私には駅から教会まできつかった。しかし、教会に来ると元気にされる。「キリスト教講座」は宗教改革について話す。一泊をびくびくしながら、どこかで大丈夫かと脳が起き（マリーゴールドの花）ていて、寝つきが悪い。日）朝まで熱もなく元気に。庭、周辺を掃除して、信徒さんを待つ。これは嬉しい。通常通り、礼拝、掃除、役員会と無事に終える。この一日が恵みである。月）祭日だが、幼稚園に庭師さんが入るので、7時半から幼稚園に来ている。いつもよく気を使い、働いてくれる家内に前日、「起きなくても良いよ」と言っていたので、今日は玄関で見送りのない出発だった。結婚してから私のため、子どもらのため、教会のために気を使い、働いてくれたと感謝。そう本気で思っている、つい口喧嘩は続く。やれやれ。火）体育館で運動会の練習だが、体力



がなくて
帰る。
た。甘木
左の写真
←AIで
加工→
を受けて
っている



礼拝だけをして、幼稚園に面白いものが送られてき
教会の礼拝の光景をAIに加工させもので、凄い時代
である。水）幼稚園の朝礼に出て、大学病院へ診察
いく。検査結果も良くな
が、逆もある。人間の体

は不思議で、薬と体は面白い。抗生物質投薬の為に快便から便通が悪くなったと言うと、「抗生物質を長く飲んでいるので、腸の環境が変わったのかもしれませんが」といわれました。「腸内細菌のバランスを壊したのかしれません」と。手も震え、立ち眩みがあり、小さな字は書きづらくなったので、次は頭のCT検査です。帰宅し家電の店までタクシーで家内と出かける。帰り、一時間に一步のバス路線を二人で見つける。20分待つて乗って帰る。こういうことを二人で出来て、楽しめるは幸福だ。ずっとこうしてきた。木）夫婦で松崎保育園へ。す



ぐに日善幼稚園に帰り、運動会の練習のため外に行ったので、留守番。園児が返ってきて、福岡空港へ。東京。金）午前中から羽村幼稚園の土地区画整理の担当の方と話しあい。管理者会議。17時
（杏子の実）の飛行機で福岡。病人かと思う？